

要 旨

13:30～13:40 開会挨拶◇北海道支所長

13:40～14:10 発表1

- ◆演 題：「危険生物スズメバチの天敵—女王バチを操る寄生線虫—」
- ◆発表者：佐山 勝彦

スズメバチは代表的な危険生物ですが、彼ら自身にもさまざまな天敵がいます。平成19年度の本発表会でご紹介した新種の寄生線虫もそのひとつです。この線虫はスズメバチの女王バチを不妊化して巣を作らせなくするため、巣の数を減らして刺傷事故の減少に利用できる可能性があります。しかし、スズメバチの生物的防除の可能性を探るうえで、この線虫には不明な点がたくさんありました。その後の研究により、寄生線虫の国内分布や寄主範囲のほか、線虫がスズメバチの行動をうまく利用して新たな感染場所にたどり着くことが明らかになりました。今回はそれらの研究成果についてご報告します。

14:10～14:40 発表2

- ◆演 題：「野生生物観測システムの確立へ向けて—これまでの歩み、現状、そして課題—」
- ◆発表者：平川 浩文

自然は常に変化しています。野生生物も例外ではありません。特に近年は、人間の影響による大きな変化が目立ちます。彼らとうまくつきあっていくためには、その分布や数の変化を的確に知る必要があります。森林総合研究所北海道支所では自動撮影による野生生物の調査手法を開発し、6年前（2008年）の支所研究発表会で「自動撮影による野生生物モニタリングの勧め」と題する講演を行い、観測への参加を呼びかけました。その結果、現在までに北海道森林管理局の6機関と道内に拠点を持つ4大学の参加を得て、道内16地域で野生生物観測を行っています。本講演では、この6年間の歩みと現状、分かってきたこと、今後の課題についてお話しします。

14:40～15:00 休憩

15:00～15:30 発表3

- ◆演 題：「北の森の希少樹種—保全のための課題と対策—」
- ◆発表者：金指 あや子

日本列島には、さまざまな希少樹種があります。しかし、希少樹種の多くの自生地は、森林伐採や土地開発など人為的要因により衰退し、絶滅が危惧されています。自生地が分断・縮小すると、遺伝的多様性の減少や、分断化に伴う遺伝子流動の減少や遮断が起こります。小集団化は、花粉制限や近交弱勢による種子生産の低下をもたらします。また、次世代が更新できる局所環境の劣化や競合種の侵入も、希少樹種の生育や更新を妨げます。このような希少樹種の自生地を持続的に保全するためには、集団間の遺伝子流動を保障し、健全な更新を促すための保全管理が必要です。北海道の希少樹種を中心に、その現状を紹介し、保全のための対策について考えます。

15:30～16:00 発表4

- ◆演 題：「連携・協力で希少植物を守るために—レブンアツモリソウの事例—」
- ◆発表者：八巻 一成

レブンアツモリソウは、礼文島だけに生息する植物です。そのかわいらしい形と希少性から植物愛好家に人気が高く、花を見るために島には毎年、多くの観光客が訪れます。しかし、この植物はかつて大量に盗掘され、絶滅の危機に瀕してしまいました。現在、わずかに見られる自生株を盗掘から守るために、監視・パトロール活動が続けられています。また、人工培養技術によって人工的に繁殖させる取り組みも進められています。この植物が将来も島で咲き続けるためには、多くの関係者の連携・協力が欠かせません。発表では、関係者の連携・協力という面から、今後の保全活動のあり方について探ります。

16:00 閉会挨拶◇北海道支所 地域研究監